



＜教育目標＞

- 思いやりのある子ども
- 進んでやりぬく子ども
- じょうぶな子ども
- よく考える子ども

平成31年4月26日(金)
 練馬区立豊玉第二小学校
 校長 永井 美奈子

豊二小だより 5月号

第79回目の開校記念日に寄せて

校長 永井 美奈子

校庭の木々の新緑が鮮やかさを増し、色とりどりの花々が爽やかな風に揺れています。ビオトープをそっと覗くと、冬の厳しい寒さを乗り越えたメダカが、群れをなして気持ちよさそうに泳いでいるのを見られます。清々しい光のきらめきと、生命の躍動を感じさせる季節の到来です。

さて、10連休となるゴールデンウィークの最終日、5月6日(月)は、豊玉第二小学校第79回目の開校記念日です。私は、この時期になると、必ず豊二小の歴史に関する資料を読むことにしています。特に10年ごとの記念誌は、この地域や本校の移り変わりが写真と共に分かりやすく記載されており、貴重な情報源です。単に知識を得るだけではなく、その時代ごとに学校を支えてくださった方々の思いに触れ、託された思いや願いを引き継いでいこうと、気持ちを新たにできる機会にもなっています。

本校は昭和15年4月1日に豊玉尋常小学校より分離し、東京市板橋区立豊玉第二尋常小学校として開校しました。全校児童数696名、12学級でのスタートでした。その後、昭和18年7月に東京都板橋区立豊玉第二国民学校、更に昭和22年4月に、練馬区立豊玉第二小学校と校名変更し現在に至っています。練馬区では12番目、戦前に開校された数少ない小学校の一つということです。



校章は、母体校の豊玉小学校と同じ「稲穂」をデザインしたのですが、大変深い意味があることが分かりました。豊玉小学校が開校した当時、この地域の方々は、子供たちのために沼を田にして耕し、共同で稲を育て、収穫したお米をお金に換えて授業料を補い、学用品を買いそろえてくださったのだそうです。校章には、地域の方々がくださったことを忘れず、感謝の気持ちをもって励もうという意味が込められているとのことでした。

また、開校当時この地域には、子供たちが「ちょぼいち山」と呼んでいた雑木林におおわれた小高い丘があり、田畑も多く武蔵野の面影を一杯に残した風景であったそうです。その「ちょぼいち山」の一部を削り、畑を埋め立てて敷地にし、校舎を建てたそうです。しかし、もともと畑であったため、土が軟らかくて建物の基礎づくりにお金がかかり、とても苦労したとのことでした。



木造校舎の頃の豊二小

記念誌を読んでいて、私は開校当時のことを記したある一文が目にとまりました。「校舎を建てるにも校地と資金がなく、地元の方々の物心両面からの多大な御支援により設立できた。」豊玉第二小学校が「地域の学校」として愛され、今もなお大切にされているのは、本校設立に関わった地域の方々の思いや願いが、現在まで脈々と受け継がれているからなのです。

本校の子供たちは、保護者、地域の方々からたくさんの愛情と御支援をいただきながら「気持ちのよい挨拶」「礼儀正しさ」などの素晴らしい伝統と校風を築いてきました。中でも43年間も受け継がれてきた「ノーチャイム」は、子供たちの「自立心」と「自律性」を育むためのよい伝統となっています。これからも、79年の歴史の中で創り上げられてきた伝統や校風を礎に、保護者や地域の皆様との深い信頼関係を築きながら、「児童一人一人の力を最大限に伸ばし輝かせる学校」、「互いに心が響き合う学校」を目指し、努力してまいります。

平成から令和へ、新しい時代の幕開けと共に80周年に向けて歩み始めます。笑顔あふれる豊玉第二小学校の子供たちの未来に向け、今後とも皆様方の御支援、御協力をどうぞよろしくお願いたします。